

## 自発表現としての「ようになる」文

著者	尹 順徳
雑誌名	言語科学論集
巻	8
ページ	73-84
発行年	2004-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/30766">http://hdl.handle.net/10097/30766</a>

## 自発表現としての「ようになる」文

尹 順徳

キーワード：意味的自発、有情、意志性、変化

### 要旨

「ようになる」文の中には自発表現と捉えることができるものがある。そこで、「ようになる」文がどういう場合に自発表現になり得るか、またその形式の持つ自発表現のはたらきはどのようなものであるか、という点について考察した。

その結果、「ようになる」文が、自発表現になる場合は、①「ようになる」の前接動詞が、感情、感覚、知覚、思考、判断、自動作用を表す動詞、あるいは主体の身体的変化によるなりゆきを表す動詞あるいは、主体におこる自然現象を表す動詞である場合、②習慣・反復を表す連用修飾語、非意志性・自然性を表す連用修飾語と共起する場合、そして③「ようになる」がおかれた文脈から自発になる場合があることがわかった。また「ようになる」文は典型的な自発表現よりひろい範囲で用いられることがわかった。

### 1. はじめに

「ようになる」文には、次のように自発表現といってよいような例がある。

- (1) 私は、怒鳴り合いながら、しかし共にこの悪戦を切り抜けようと苦闘しているうちに、崔に対して友情に似た奇妙な感情を抱くようになっていた。(沢木耕太郎、一瞬夏 p.12)

この(1)は、事態が主体の意志とは関係なく、自然に、おのずから、ひとりでに発生することを表しており、意味的な自発表現であると考えられる。「レル・ラレル」の形以外にも自発があると考えたとき、(1)のような「ようになる」文も、自発表現として捉えることができるといえる。

これまで「ようになる」文は自発カテゴリーの中では分析されてきていない。「ようになる」文についてこれまでの研究は、小谷博泰・原田登美(1995)が、「ようになる」を「変化した後の事象の状態」、「変化の後に事態が現在の状態にある」とした。また、北村よう(1989)が、「ようになる」を、*aspecutual character* として

把握し、状態動詞に「ようになる」がついて状態の変化を表すと述べている。しかし、これらは「ようになる」文を自発表現としてとらえようとしたものではない。

そこで本稿では、「ようになる」文がどういう場合に自発表現になり得るか、また、その形式の持つ自発表現のはたらきはどのようなものであるのか、典型的な自発表現とどのような違いがあるのか、さらになぜ自発表現になり得るかなど、「ようになる」文が自発表現として成立する条件やその性格について検討することを目的としたい。ただし、比喻・推定などの内容を示す「ようになる」は、本稿で扱おうとするものとはかなり意味・文法的性格が異なるものであるので、扱わない(注1)。

## 2. 自発表現とは

まず、ここで扱う自発表現とはどのようなものであるかをみておくことにする。自発表現は、形態的・意味的・統語的側面から考えることができる。

まず、形態的には次のような捉え方がある。

(ア) もとの述語動詞にレル・ラレルがついて形態変化が起こるものとする(以下ラレル形とよぶ。山田孝雄 1936、森山卓郎 1988)。

(イ) 「割れる」のようなものとする(注2)(以下 eru 形とする。寺村秀夫 1982)。

(ウ) ラレル形と eru 形との両者とする(本居春庭の『詞の通路』)。

(エ) ラレル形と可能動詞の一部動詞(思える、泣ける)と「想像する」のような「ある事物についての認識を得る」という意味特徴をもった動詞からつくられるものとする(藤井正執筆「自発」『日本文法大辞典』)。

また、意味的には、次のような三点を満たしたものだとされる(寺村 1982、森山 1988 など)。それは、述語で表している事態が、

- ①主体が有情であり、
- ②主体の意志とは関係なく、
- ③自然に、おのずから、ひとりでに発生することを表すものである。

ここでの「おのずから発生する」とは、主体を囲んでいるある状況の要因、すなわち外的要因によってそれに影響をうけて主体に「変化が生じる」「変化が発生する」ことを表すものであると考えられる。

さらに統語的には、もとになる基本文が存在し、その基本文と自発文とのヴォイス的な格交替現象を起すと共に二格で主語性を保存するものであるとされる。

さて、「ようになる」文を自発表現として扱うためには、自発というカテゴリーを広げて考えることになる。具体的にいえば「ようになる」文は、統語的・形態的

な特徴がないため、本稿では、意味的特徴①②③を満たしたものを自発（表現）とすることにする。なお、本稿では、レル・ラレルがついて形態変化が起こるものを典型的な自発表現とよぶ（注3）。

次のようなものが典型的な自発表現の例である。

(2) 私はぼんやりとそれを眺めながら、虚しい思索に己を委ねたい気になった。

絵が我々と同じ時間を享けると云うことが、この時の私には、如何にも不思議に思われたのである。（平野啓一郎、日蝕 p.142）

### 3. 前接動詞

それでは「ようになる」文が自発表現になるのはどのような場合であろうか。

「ようになる」文が自発表現になる場合には、「ようになる」の前接動詞の意味的性質が関与していると考えられる。そこで以下では、この点について検討する。

さて、次のようなものはさきの①②③を満たしているものである。これは自発表現と考えてよい。これらの前接動詞の意味的特徴はどのようなものであろうか。

#### 〈感情・感覚を表す動詞〉

(3) 加藤寛治提督は、帰国後「満腔の不满をぶちまけるようになり、それが海軍の小状将校はもとより国民の多くに強くアピールすることになった。（阿川弘之、五十六 p.131）

(4) 「どうだ、リンカーンは偉いだろう。大統領の中では、人間として彼が一番だ。僕はこの前此处に来て時、その伝記を四、五冊読んで、彼を敬服するようになった。（阿川弘之、五十六 p.269）

(5) 世界が今石炭と鉄の時代から次第に石油と軽金属の時代に移り始めている事を、鳥肌で感じ取るようになったのは、～（阿川弘之、五十六 p.85）

これらは、感情・感覚を表す動詞であり、主体自身の肉体や精神に関する内的側面を表すものである。(3)～(5)は、主体が外側の事柄を認知し、それに起因して主体に感情・感覚が自然に生起し、次第に何らかの状態・帰結に達するその変化の過程を表している。このことは、典型的な自発表現の意味的特徴①②③を満たしていることになり、自発になっているといえる。このように「ようになる」文が自発表現になるような感情・感覚を表す動詞は他に、「思い悩む、増悪する、悩む、苦しむ、悔いる、腐心する、覚える」などがある。

#### 〈知覚を表す動詞〉

- (6) (おれが) 家の門を出る時にゃ、まだ薄暗かったが、夏は夜明けの明るくなるのが早いから、村のはずれへ出たらもう畑一枚先の人顔が分るようになった、～ (伊藤左千夫、姪子 p.8)
- (7) 或日何かの折に、「いけぬのう、お身たちは」と云う声を聞いてからは、どうしても、それが頭を離れない。それ以来、この男の目にだけは、五位が全く別人として、映るようになった。(芥川龍之介、芋粥 p.9)
- (8) 私たちは新聞の自殺者名のなかに幾人かの小工場経営者の名を読むようになった。(開高健、巨人玩具 p.205)

これらは、いずれも知覚を表す動詞である。(6) は、ものが見えて主体に自然に認知される変化を、(7) は、主体におのずから感じられる変化を表している。(8) は、動詞「読む」が「新聞を読む」のように「読む」という動作そのものを表すのではなく、新聞に名が現れること、名が出ることを、主体が自然に見かけるようになったという意味で使われている。このことは、典型的な自発表現の意味的特徴①②③を満たしていることになり、自発表現になっているといえる。このような知覚を表すものは他に、「見える」「聞こえる」等の動詞がある。

#### 〈思考・判断を表す動詞〉

- (9) 彼はまた、二年半のドイツ駐在中の経験と研究とから、ドイツと結ぶことは、何処の国にとっても頗る危険だと信ずるようになり、ヒットラーの「マイン・キャンプ」を読んで、～ (阿川弘之、五十六 p.125)
- (10) 「芳賀」はいろんな状況から段々「仲代」の話を真実らしいと思うようになる。(阿川弘之、五十六 p.308)

これらは、思考・判断を表す動詞である。(9) の「信ずるようになる」行為は意志性を持った行為とは考えにくく、(10) の「思うようになる」行為も、命題について主体の言い方が推定になっていることからみると、積極的に意志性の持った思考行為をするとは考えにくい。これらは、事態が次第に何らかの状態・帰結に達するその変化の過程そのものを表している。このことは、典型的な自発表現の意味的特徴①②③を満たしているといえ、自発表現になっているといえる。

#### 〈主体の身体的変化によるなりゆきを表す動詞〉

- (11) 息子は成長したのだ。(息子は) 成長して、男らしいわがままを見せるようになってきた。(石川達三、青春蹉跎 p.79)

これらは、主体の身体的変化によるなりゆきを表す動詞である。「わがまを見

せるようになる」の「見せる」は、例えば「誰かに本を見せる」の「見せる」意味ではなく、「わがままをする」意味である。「見せるようになる」行為は、意図をもった行為とは考えにくく、主体が成長していくとともに自然に主体に変化が起こる現象を表している。このことは、典型的な自発表現の意味的特徴①②③を満たしていることになり、自発表現になっているといえる。

#### 〈自動作用を表す動詞〉

- (12) アメリカ在勤三カ年の間にポーカー、ブリッジはもとよりバカラ、ルーレットの類まで「大いに勉強して」、山本が海軍次官になるごろにはそのお相手が充分つとまるようになったと～（阿川弘之、五十六、p.287）

これは自動作用を表す動詞である。「ようになる」は主体自身の肉体や精神に関する内的変化だけに用いられるわけではない。話し手自身の経験ではない、第三者の変化にも用いられている。「つとまるようになる」事態は、事態が次第に何らかの状態・帰結に達するその変化の過程を表している。このことは、典型的な自発表現の意味的特徴①②③を満たしていることになり、自発表現になっているといえる。

#### 〈主体におこる自然現象を表す動詞〉

- (13) ピカドン以後、広島へ来ていた丈夫な者が死ぬようになったのは、ピカドン爆弾に毒瓦斯が仕込まれてあったためである。（井伏鱒二、黒い雨 p.1649）

これは「花が咲く」ような自然現象ではなく、有情である主体に起こる自然現象を表す動詞である。(13)の「死ぬようになる」事態は、話し手が、第三者に起こる自然現象を述べており、事態が次第に何らかの状態・帰結に達するその変化の過程そのものを表している。このことは、典型的な自発表現の意味的特徴①②③を満たしているといえるので、自発表現とみてよいだろう。ただし、自発表現にも自発らしさの段階があるとすれば、このようなものは最も周辺的なものと思われる。

### 4. 連用修飾語との関わり

ここまで、「ようになる」の前接動詞をみてきたが、「ようになる」文が自発表現になるのは前接動詞の性質だけが条件ではない。「ようになる」文が、自発表現になる場合は、意志性がないことや、自然に行なわれていることを示す連用修飾語と関わりがあると考えられる。そこで、次にその連用修飾語との共起関係をみることにする。

さて、次のようなものは自発表現になるための条件①②③を満たしているので、

自発表現と言ってよい。

〈非意志的に行なわれる事態を表す連用修飾語〉

(14) ぼくは自分自身の画を描く動機を失ってしまったのだ。気がつくとぼくは小さな、生きた肉体の群れをキャンバスと感ずるようになっていた。(開高健、裸の王様、p.219)

(15) みんなの耳と目がしらずしらず人の秘密をうかがいさぐるようになっているのだ。(壺井栄、二十四瞳 p.1267)

この(14)(15)は、典型的な自発表現の意味的特徴①②③を満たしており、自発表現になっているといえるものである。これらには、非意志的に行なわれる事態を表す連用修飾語と共起している。(14)(15)の「気がつく」「しらずしらず」は意志性がないことを示す連用修飾語である。とくに(15)の前接動詞は「うかがいさぐる」であって意味的性質からみても自発表現となり得るような要素はない。それにもかかわらず自発表現となっているのは、「しらずしらず」という連用修飾語が共起しているためである。このように「しらずしらず」のような非意志的に行なわれる事態を表す連用修飾語と共起することによって「ようになる」文が自発表現になる場合があるといえる。

〈習慣・反復を表す連用修飾語〉

(16) その奇異な初対面の夜から、私達は毎日訪ね合ったり、一緒に散歩したりするようになりました。(梶井基次郎、Kの昇天 p.46)

(17) 山本は、土曜、日曜にはほとんど欠かさず榎本の家へ身を避けて、勝手に戸棚から着更えを出し、麻雀をして遊ぶようになった。(阿川弘之、五十六、p.473)

これらも連用修飾語が共起することによって自発表現になっているものである。「ようになる」文が、習慣的繰り返しを表す連用修飾語と共起する場合である。(16)(17)は、「訪ねる」「散歩する」「遊ぶ」行為は主体の意志を持つ行為であるが、意志性はあまり際立っておらず、この場合、「毎日」「土曜、日曜にはほとんど欠かさず」の連用修飾語によって、習慣的繰り返しが表されている。すなわち、習慣的繰り返しが自然に行なわれていることに重点を置いた表現であるといえる。このことによって、自発表現の意味的特徴を満たしており、自発表現になっているといえる。このような繰り返しを意味する連用修飾語は他に、例えば「しきりに」「このごろは」「毎夜」「(土曜日)ごとに」などが見られる。

### 〈自然に行われる事態を表す連用修飾語〉

(18) 私の精神はやはり絶えず揺れ動いてはいたが、ある意味での落ち着きを取り戻した。日本人としてごく自然に振舞うようになったし、それがそのまま快く受け入れられた。(藤原正彦、若数学 p.90)

(19) 私はその時御嬢さんのことで、多少夢中になっている頃でしたから、自然そんな言葉も使うようになったのでしょ。 (夏目漱石、こころ下 p.206)

また、これらは「ようになる」文が、自然に行なわれることを表す連用修飾語と共起する場合である。「振舞う」「使う」動詞は、主体の意志を持つ行為であることを表すが、「自然に(と)」「自然」のような連用修飾語との共起によって自然性と非意志性を表して自発表現になっているといえる。このような自然な事態を表す連用修飾語は、他には「おのずと」のようなものがみられる。

## 5. 前後の文脈

これまでは、「ようになる」文が、自発表現になる場合は、「ようになる」文の前接動詞の意味的性質、意志性がないことや、自然に行なわれていることを示す連用修飾語と関わりがあることについて検討した。しかし、「ようになる」文が自発表現になるのは前接動詞の意味的性質と連用修飾語だけが条件ではないと考えられる。さきにあげた①②③の条件が前後の文脈のあり方によって満たされる場合もあるのである。次のようなものがそれである。これらは典型的な自発表現の条件①②③を満たしていることになり、自発表現になっているといえる。

(20) この一方的な喧嘩はあわてて中に入った私たちによってやっと、とり鎮めましたが、キチジローはそれ以後、我々に卑屈な笑いをうかべるようになりました。(遠藤周作、沈黙 p.55)

(21) 我々二人は妙にいらいらとして神経質になり、相手の一寸した過ちにもきつい目をむけるようになっています。(遠藤周作、沈黙 p.7)

これらは、前接動詞がさきに示したものではなく、またさきに示したような連用修飾語もない。しかし、自発といってよい。自発になり得るのは文脈のためである。前後文脈から自発表現になっているものだといえる。(20) の、「笑いをうかべる」という行為は、主体の周囲の状況に影響をうけて、それに起因しておのずから生じた事態になっている。同様に(21)の、「我々二人は妙にいらいらとして神経質になり」は、主体の心理的な側面を表し、主体の周囲の状況の影響をうけて主体に「き



つい目をむける」行為が自然に生じたことを表している。

さて、ここで、「ようになる」文が、前接動詞、連用修飾語、文脈のような条件が整った場合、なぜ自発表現として解釈できるのか、いままで述べてきたものを整理してみたい。典型的な自発表現は、意味的に主体を囲んでいるある状況による要因、すなわち外的要因によってそれに影響をうけて主体に「自然に生じる」「おのずから発生する」変化を表すものである。「ようになる」文は、意味的に事態が次第に何らかの状態・帰結に達するその変化の過程を表す表現である。その変化という側面が「ようになる」と典型的な自発表現と共通の分母になるのである。そのため、自発表現として解釈できるようになると考えられる。

## 6. 典型的な自発表現と「ようになる」型自発表現との相違点

さて、それでは、典型的な自発表現と「ようになる」型自発表現とは、どのような点が異なるだろうか。「ようになる」型自発表現は、典型的な自発表現とはさきにあげたように形態的なちがいがあがあるが、ここでは、それ以外のちがいについてみていくことにする。自発表現としての「ようになる」文は、どのような性格を持つのか、どのような要素を他に持つのかを明らかにする（〈典〉は典型的な自発表現を、〈よ〉は「ようになる」自発表現を指す）。

### 6. 1 「ようになる」の主体の人称と格

まず、典型的な自発表現と「ようになる」型の自発表現の人称と格の相違点について見てみる。

〈典〉：(22) 私には、因縁としかいいようのない奇妙なものが何重にも絡み合い、ギリギリと音を立てていくように感じられた。(沢木耕太郎、一瞬夏 p.602)

〈よ〉：(23) 一日に一度や二度、だれかがこれに似た叱責をくらのを見て、信夫はその男の心理状態を不思議に思うようになった。(三浦綾子、塩狩峠 p.1957)

(24) 私も臨時収入があるたびに半分を内藤に回していたが、それも次第に難しくなってきた。私は別にかまわなかったが、内藤が負担に感じるようになりはじめたからだ。(沢木耕太郎、一瞬夏 p.114)

(25) その無表情が、二十年近くものあいだ背負わなければならなかった困難に対する、彼なりの防禦の方法だということは、私にも少しずつわかるようになっていた。(沢木耕太郎、一瞬夏 p.44)

(26) 俺にはこのごろ、内藤足の男を好きになる女が、カンでちゃんとわかるようになった。(三島由紀夫、金閣寺 p673)

まず、人称についてみると、典型的な自発表現は、ラレルで表される述語動詞が主に「思われる」「考えられる」「感じられる」等、主に主体の内的変化をあらわし、話し手と主体とが同一人物で、主体が主に一人称に限られていることがわかる。主体の内的変化は多くは主体自身に行なわれている変化で主体自身がよく知っていることだからである。そのため、三人称と共起しにくい。それに比べ「ようになる」文は、話し手と「ようになる」の主体とが同一人物である場合とそうでない場合があるため、一人称・三人称に用いられる。(25) (26) のように、話し手が主体自身なら、一人称になるし、(23) (24) のように、話し手が第三者の変化を述べることになる、三人称になる。

また格の表示についてみる。典型的な自発表現は、主に主体が一人称に用いられているため、「に」「には」格が表示される。一方、「ようになる」文は、話し手が第三者である主体の変化をどのように述べたいかによって「は」「が」「に」「には」「にも」格等までもが選択される。このことから、主体の人称と格の制限は「ようになる」文の方が緩いといえる。

## 6. 2 動詞

ここでは、自発になる「ようになる」文と典型的な自発表現になる動詞についてその種類の面において、差が見られることを述べる。典型的な自発表現形式は、主に主体の内的側面を表す動詞、感情・感覚を表す動詞、思考・判断を表す動詞などに限られており、きわめて一部の動詞が典型的な自発になり得る。例えば、「考える、思う、思い出す、感じる、予感する、悔やむ」などである。

一方、「ようになる」形式は主体の内的側面を表す動詞を含めて、第三者に行われる事象、事態、事柄を表すことができる。「ようになる」型自発表現になり得る動詞は感情・感覚動詞、思考・判断動詞だけではなく、習慣・反復を表す動詞、自動作用を表す動詞、主体の身体的変化によるなりゆきを表す動詞などがある。さらに主体（第三者）に起こる自然現象を表す動詞なども「ようになる」型自発表現になり得る。そのため、典型的な自発表現形式とくらべて動詞の種類が多く、したがって動詞の数が多くなる。例えば、「分る、映る、(名を)読む、見せる、つとまる、しぬ、飲む、遊ぶ、うかがいさぐる、振舞う、使う、浮かべる」などがある。

### 6・3 連用修飾語との共起関係

また、典型的な自発表現と「ようになる」型自発表現とは連用修飾語との共起にちがいがあある。次に具体的な例をあげて説明することにする。

〈典〉：(27) わたくしは埋葬地に行くあいだに、だんだん激しい感情の中に落ちるのが感じられました。(和田とも美訳、冬の幻 p.308)

〈よ〉：(28) わたくし自身、祖母も急死、父も急死という体験から、死について考えるようになり、次第に罪ということも考えるようになりました。(三浦綾子、塩狩峠 p.246)

(29) 音楽なんか、やっているうちに自然と分るようになるわよ。…ねえ、譲治さんもやらなきゃだめ。あたし一人でやったって踊りにいけやしないもの。(谷崎潤一郎、痴人の愛、p.450)

(30) 私たちは、試合までの日数が二週間を切り、韓国のコミッションから公式の招待状が届くにいたって、ようやく緊張するようになった。(沢木耕太郎、一瞬夏 p.459)

(31) 僕は被爆後二年たって、もう大丈夫だと思うようになった頃から～(井伏鱒二、黒い雨 p.1778)

典型的な自発表現は、主体におのずからおこる変化を表してはいるが、変化の局面そのものを表しにくい。(27) の、「だんだん」が典型的な自発表現と共起しているようにみえるが、これは、「落ちる」にかかるものである。主体に「感じられる」行為は瞬間的な変化で、「だんだん」と「感じられる」とは共起しにくい。

一方、「ようになる」文は、連用修飾語とともに変化の局面を表すことができる。たとえば、(28) のように、漸次的変化を表す副詞「段々(に)、次第に、少しずつ、徐々に」など、(29) のように、時間の幅が限定されていてその間に、主体変化が行なわれている過程を表すもの「～ているうちに」、また(30) のように、実現していないが、やがて実現する事態を示し、主体変化という結果に至ることを表すもの「やがて、ついに(は)、ついつい、とうとう、いよいよ、やっと」など、また(31) のように、変化が起こった時点を示すもの「～てから、(3ヶ月前) から、～以来、～以後」、などが共起することは、「ようになる」型自発表現の変化と典型的な自発表現の変化が違っていることを裏付けている。

## 7. 結論

ここまで述べてきたことをまとめると以下ようになる。

さきの①②③の三つの条件を満たす自発表現として考えられる場合は、次のようである。

- 〈1〉「ようになる」型の自発表現は、「ようになる」の前接動詞が、感情・感覚動詞、知覚動詞、思考・判断動詞、自動動作を表す動詞、主体の身体的変化によるなりゆきを表す動詞、主体におこる自然現象を表す動詞などの場合で、「ようになる」の前接動詞の意味的な性質によっておおよそ決定づけられる。
- 〈2〉しかし、必ずしも前接動詞のみで決定されるわけではない。反復・習慣をあらわす、意志性がないことや自然に行われていることを表す連用修飾語との共起、さらには、前後文脈がその意味を規定する場合もある。

また、典型的な自発表現と「ようになる」型の自発表現との相違点は、次のようにまとめられる。

- 〈3〉主体の人称について、典型的な自発表現は主に一人称に用いられており、「ようになる」型の自発表現は、「ようになる」の主体が一人称、三人称に用いられる。格については、人称に連動していることがわかる。このことから、主体の人称と格の制限は「ようになる」の方が緩い。
- 〈4〉前接動詞についてみると、典型的な自発表現は、主に主体が自分自身の経験を述べるので、内的側面を表す動詞に限られている。それに比べ「ようになる」型の自発表現は、主体自身の内的側面のみでなく、話し手が、第三者の主体変化にも用いられていることから、「ようになる」文の方が動詞の種類が多い。
- 〈5〉「ようになる」型の自発表現は、漸次的変化、結果に至る変化、時間の幅が限定されたその間の変化などの変化を表す連用修飾語と共起するのに比べ、典型的な自発表現は変化を表す連用修飾語と共起しにくい。

本稿では、「ようになる」文が自発表現になりうる条件を検討したが、このことから、現代日本語の自発表現はレル・ラレル形という典型的なものを中心に周辺的なものに広がっているとみられるのではないか。その周辺的なもののひとつとして「ようになる」文があると考えられる。そして、これ以外に自発表現といえるものは他にも「てしまう」などがある。これらを含めて、自発表現の体系は成り立っているといえそうである。このような自発表現の体系をいうべきものを、今後、明らかにする必要があるといえよう。

## 注

1. 次のような「ようになる」は、比喩・推定の内容を示す。

(1) 老人の無言は又しても私の日々にのしかかる不安になった。老師の存在が大きな力になり、目の前をうるさく飛び回る蛾の影のようになった。(三島由紀夫、金閣寺 p.1012)

(2) 附添婦の話では、病人は一日に一回必ず激痛に襲われて、このときばかりは苦しくてたまらなくなるらしい。七転八倒の苦しみをする。からだ全体が疼痛の魂のようになるのである。(梶井基次郎、冬の蠅 p.11)

「蛾の影のようになった」は比喩を表し、「疼痛の魂のようになる」は推定を表しており、助動詞「ようだ」の連用形として用いられている用例である。

2. 本稿では、eru 形は他動詞と対応する自動詞と考える。「割れる、切れる」など、寺村(1982)が自発とするものに見られる「自然にそうなる」という意味は、他の有対自動詞「汚れる、崩れる」などと共通の特徴であるから、ここでは寺村のような立場はとらない。

3. ラレル形で表れている自発表現は、日本語の自発表現の中でももっとも中心的なもので、典型的な自発表現とよび、他のものはその周縁的なものであると考える。

## 用例出典

新潮文庫 100 冊 CD-ROM、平野啓一郎『日蝕』新潮社 1998、

和田とも美訳「冬の幻」『冬の幻』韓国女性作家作品集 朝日カルチャーセンター1995

## 参考文献

北村よう (1989) 「日本語におけるアスペクトと aspectual character」 吉沢典男教授追悼論

文集編集委員会編『吉沢典男教授追悼論文集』東京外国語大学音声学研究室

小谷博泰・原田登美 (1994) 「変化表現の周辺」『甲南大学紀要』文学編 95, 1 - 17

島田昌彦 (1977) 「解説」『詞の通路 下』勉誠社文庫 26

寺村秀夫 (1982) 『日本語シンタクスと意味 I』くろしお出版

宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』むぎ書房

森田良行 (1978) 『基礎日本語』3 角川書店

森田良行・松本正恵 (1989) 『日本語表現文型』アルク

森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院

山田孝雄 (1936) 『日本文法学概説』賓文館